

【調査報告】

社会生態レジリエンスの概念枠組みから見た

小学生が抱えるストレスの背景

～Child and Youth Resilience Measure-Revised

(子どもと青少年のレジリエンス尺度修正版)を手掛かりに～

The Background of Stress of Elementary School Students through the Lends of Conceptual Framework of Social Ecological Resilience - With a Clue of Child and Youth Resilience Measure-Revised -

朝岡 健吾（北星学園大学大学院 社会福祉学研究科 博士後期課程）

要旨

本研究では、社会生態レジリエンスの概念枠組みを用いて、ストレス下における児童の社会環境への適応及びストレス要因になり得る要因について整理することを試みた。そのため、Child and Youth Resilience Measure-Revised（子どもと青少年のレジリエンス尺度修正版）を用いるとともに、この尺度の日本語版を作成して信頼性と妥当性も併せて検討した。

2021年7月～10月にかけて小学4年生から6年生を対象とした無記名自記式の調査を実施し、137名の回答を得ることができた。調査票の分析にはSPSS ver.24を使用した。悩みの具体的記述を整理した結果、児童が家庭環境よりも、学校生活における友人関係や学業について悩んでいることがわかった。主因子法及びプロマックス回転を用いた探索的因子分析の結果、4因子が抽出された。児童用SOCスケール日本語版との間で有意な相関関係を示したものの、2因子構造の原版と異なる因子数が抽出された。文化的差異、サンプルの不足等が考えられ、今後の課題となった。

キーワード：「社会生態レジリエンス」「社会環境への適応」「ストレス要因」

I 研究の背景

人々はあらゆる人間関係を断ち、ひとりで生きていくことは困難で、周囲の人たちと調和のとれた関係性を保つことで社会生活を維持している。家族、学校、地域など私たちが属するすべてのシステムは相互的、互恵的な関係性で結びついている。このような家族、学校の友人、職場の同僚、地域住民等は総称

して社会環境とも呼ばれる(Gitterman, Knight, & Germain 2020 : 56)。これらの社会環境によって構成されている対人ネットワークは私たちの周りに無数に存在し、それは幾重にも重なり、また網目のように張り巡らされている(Capra & Luisi 2014 : 68)。すべてのシステムはネットワークの内外で相互作用を繰り返す。その過程で新しい関係性が生まれることがあれば今まで維持してきた関係

性に変化が生じ、また関係性自体が失われることもある。私たちを取り巻く関係性のネットワークは力動的、流動的であり状況の変化に呼応する形で変容を繰り返す。変容への過程は予測不可能で原因と結果が必ずしも一致するものではない。

家庭、学校、職場、地域などといったシステム内、またこれらシステム間の関係性のネットワークにおいて、人々が互いに近すぎず遠すぎない適切な距離感や良好な信頼関係を保ち、多種多様な社会関係と調和を保つことで、ネットワーク上で自分の立ち位置を安定させるという平衡状態を維持している。しかし、個人の精神面などといった何らかの内的要因、社会環境などの外的要因によりネットワークが脆弱な状態に陥れば、ごくわずかな問題の発生が人々を取り巻く状況を困難な方向へ変わせてしまう。システム間の相互作用の不調和が結果的に平衡状態を乱すことにつながるのである。同時に、それは他のネットワーク上のシステムとの関係性にも悪影響を及ぼす。人々が抱えるストレスの背景にはこのような否定的な相互作用の影響があると考えられる。

II 本研究の枠組みについて

1) ストレスの要因となり得る児童と社会環境の関係性

児童は1日の多くの時間を学校で過ごす。その中で、信頼のおける友人の存在やスクールカーストといったクラスでの権力構造などの学校生活における対人関係の質は彼らにとって自己肯定感の基盤となることから、彼らの学校生活の行方を大きく左右する要因となる。また、都市化による地域の地縁的つながりの希薄化や価値基準の流動化による地域での子ども同士の交流活動の減少(文部科学省

2009; 心理科学研究会 2009: 49)により、児童の属するネットワークの大部分は学校生活での人間関係で占められている。

彼らはそのことを十分に理解しており、学校でのネットワーク内の関係性を円滑に保つため、周囲へ相当な気配りをするとともに、その場の空気や相手の期待を先読みする。子どもを取り巻く人間関係について研究している社会学者の土井隆義も、多くの児童は学校という閉鎖的な空間の中でひとりぼっちにならないように、集団の中で自分の居場所を確保して人間関係を滑らかなものにするために、予定調和的な関係を崩さないように努めると述べている(土井 2014: 72-75)。多くの児童は友達との関わりを楽しいと思う反面、表面上のつながりを維持するために、互いに相手の期待を読んで、それに応えるように演技続けようとするに負担やストレスを感じているということである。それに失敗すると関係性に不調和が生じ、結果的に児童は学校での居場所を失ってしまう。

このような相手の行動を先読みしたり、場の空気感を適切に把握するといった高度なコミュニケーション能力を要求される関係性だからこそ、一度、ネットワークから離れてしまうと再び今までの関係性に戻るには相当な時間を要する。そのため、児童も他者との衝突を避けて彼らの属するネットワークにおいて平衡状態を維持するために表面上の協調関係を維持せざるを得ない。それは、同時に彼らにとってのストレスともなり得る。本研究では児童の抱える「ストレス」を彼らと社会環境の相互作用の不調和で生じる「対人関係の困難さ」によるものと位置付ける。

2) 社会生態レジリエンスという概念

従来のレジリエンスという概念は「打たれ強い」、「傷つきにくい」といった生まれ持

った特性や個人が持つ内面的な適応能力として幅広く認識されている。しかし、近年の研究において「社会的、相互関係的なもの」として捉え直されるようになった。レジリエンスとは、逆境下において「他者との関係性の中で発生するため、広範囲の集団（例：家族、地域など）で観察可能な特質(Gilligan 2017: 446)」で人々と社会環境の相互作用の過程において生じる現象である。

Ungar ら(2017)は、主に環境学の分野において研究が進められてきた社会生態学を基盤としたレジリエンス(以下、「社会生態レジリエンス」という概念を文化的多様性のある人々の逆境に対する適応性を明らかにするための研究に用いるようになった。これにより社会生態レジリエンスはソーシャルワークを含めた人文科学系の分野で注目されるようになった。

社会生態レジリエンスは自然環境における社会生態システムの相互作用の過程において、それぞれのシステムが環境の変化に適応するために変容していくことに着目した包括的な概念である。本研究では、社会生態レジリエンスを「人々が彼ら自身の幸福や健康を維持するための心理的、社会的、文化的、物的資源を探し出すことのできる能力であるとともに、それらが文化的に意味のある方法で提供されるように個別的、集団的に交渉することのできる能力(Ungar et al. 2017)」と位置付ける。

3) 併存的妥当性を検討するためのSOCという概念

Sense of Coherence (首尾一貫感覚；以下、「SOC」)は医療社会学者の Aaron Antonovsky が提唱した概念で「自分と周囲の人々や環境で構成される社会関係に対する信頼、言い換えれば、信頼における周囲の

人々や環境に包まれて自分は生きているという感覚の度合いを測るための概念(山崎・戸ヶ里・坂野 2008: 9)」であり「ストレス対処能力」としても知られている。

この概念は3つの構成要素から成り立っている(Antonovsky 1987；山崎・戸ヶ里・坂野 2008: 9)。1つ目は、困難な状況下であっても、それを正しく理解して状況を把握できる力である。内的、外的環境から発生する刺激をどの程度、認識可能なものとして、明確かつ順序良く整理された情報として受け止められるかというもので「把握可能感」と言われる。2つめは、資源を適切に利用できる力である。刺激により引き起こされる要求を十分に満たす資源を適切な管理下で利用できることで「処理可能感」と言われる。3つめは、日常的に生じるあらゆる出来事に対して意味を見出すことである。生活上引き起こされる問題や要求に対して労力を惜しむことなく前向きに取り組む価値を見出すことで「有意味感」と言われる。

この3つの構成要素は本研究で位置付けた社会生態レジリエンスの概念と近接関係にあると考える。社会生態レジリエンスもSOCも環境への適応に焦点を置いている。逆境下に置かれても状況に適切に対応できる社会生態レジリエンスの概念は、SOCの把握可能感と共通している。「幸福や健康を前向きに維持していくことを目的とした」、「様々な資源を文化的に意味のある方法での活用」といった社会生態レジリエンスの定義は、それぞれSOCの有意味感と処理可能感に対応する。そのため、本研究において、併存的妥当性を検討するために社会生態レジリエンスとSOCの相関関係を求めることとした。

4) SOCとレジリエンスの相関関係についての先行研究

国内外において SOC とレジリエンスの比較研究が行われた例は決して多くはない。北星学園大学図書館 HOLLY 検索と Google Scholar を利用して検索を試みたが、小学生を対象とした比較研究は国内外において行われていないことがわかった。しかし、小学生以外を対象とした比較研究では、いずれも Risk Factors(リスク要因)と Protective Factors(保護的要因)という枠組みの中で、Protective Factors(保護的要因)として SOC とレジリエンスを位置付けていた。ドイツの医大生を対象とした調査(Luibl et al. 2021)では、SOC とレジリエンスは個人の内面的な資源であり、うつや不安症を軽減させる保護的要因として位置付けている。同じくドイツにおける慢性閉塞性肺疾患患者を対象とした調査(Keil et al. 2017)では、SOC の 3 つの構成要素はレジリエンスの概念と重なり合っているとしている。アメリカの大学 1 年生を対象とした調査(Hart, Wilson, & Hittner 2006)では、逆境下で肯定的な感情を保つことや自己コントロールについて SOC とレジリエンスの双方が有しているとしている。これらの研究結果では、SOC とレジリエンスとの間には有意な相関関係があることが報告されている。

III 研究の視角

児童のストレス要因となり得る悩みというストレス(以下、「悩み」)にはどのような傾向があるのか。そして、彼らは自分自身に対する評価や他者との関係性についてどのように捉えているのか。これらの問いは児童の社会環境への適応を整理する過程で明らかにできると考える。これらを踏まえ、本研究では社会生態レジリエンスの概念枠組みを用いて、ストレス下における児童の社会環境への適応について整理することを試みたい。その

ため、Child and Youth Resilience Measure-Revised (子どもと青少年のレジリエンス尺度 修正版；以下、「CYRM-R」)という尺度を用いる。CYRM-R は 20 以上の言語に翻訳され、世界で 150 以上の調査研究に用いられている(Resilience Research Centre 2018)。成人の社会生態レジリエンスを測定する尺度は中村(2023)によって翻訳され、信頼性と妥当性が検討された。しかしながら、児童の社会生態レジリエンスを測る CYRM-R の日本語版はまだ開発されていないことから、国内での児童を対象としたレジリエンス研究には未だ用いられていない状況である。

そのため、本研究では、CYRM-R を用いた調査を通じて児童の持つ社会生態レジリエンスを分析するとともに、児童の社会環境への適応について整理する。また、児童が抱えている悩みについての記述式調査を実施することでストレスとなり得る要因を整理する。国内の児童を対象とした CYRM-R を用いた研究は未実施のため、筆者が作成した日本語版を尺度として使用するための信頼性と妥当性の検討も併せて行うこととする。

IV CYRM-R の構成について

CYRM-R は個人に備わった生まれ持った特性としてのレジリエンスではなく、人々と社会環境との相互作用から生じる包括的概念としての社会生態レジリエンスを個人の内面及び重要な他者との関係性の側面から測定する(Resilience Research Centre 2018)。CYRM-R は子どもと青少年の社会生態レジリエンスを測定することを目的に、世界中の 11 の国における 14 の地域の人々が調査に協力した International Resilience Project を通じて開発された。

このプロジェクトはカナダ東海岸のノバス

コシア州ハリファックスにある Dalhousie University が設置した Resilience Research Centre(以下 ; 「RRC」)が実施主体で、社会環境や文化規範を基盤とするレジリエンスについてさらに深く探求するための方法をより精度の高いものにするを目的としている。このプロジェクトを通じて参加メンバーたちは人々の適応パターンや適応能力は生まれ持った能力に加え、生育環境、特に文化規範や属するコミュニティが影響を与えていると結論付けた(Ungar et al. 2008)。

CYRM-R は Personal Resilience (10 項目) と Caregiver (Relational) Resilience (7 項目) の 2 因子 17 項目で構成されている。これら 2 因子はラッシュ分析によって検証済みである (Resilience Research Centre 2018)。Personal Resilience は自己の内面や他者との関係性に対する認識についての評価である。それに対し、Caregiver (Relational) Resilience は両親または彼らに代わる養育者、家族、友人等との重要な関係性に関する評価である。

尺度開発時、CYRM-R は 58 項目で構成されていた。2012 年の改定で 28 項目となり、現在の尺度は 17 項目で構成されている (Jefferies et al. 2019)。58 項目の CYRM-R の信頼性と妥当性を検証するために 14 か国に居住する 1,451 名(男性 694 名、女性 757 名)の 12 歳から 23 歳のハイリスク要因(貧困、人種差別、社会的不利、養育者の精神疾患等)を持つ男女を対象にした質問紙調査が実施された(Ungar et al. 2008)。調査票回収後に実施された探索的因子分析の結果、4 因子が抽出された。それぞれの因子は「個人」、「関係性」、「地域」、「文化」と命名された。これらは社会生態レジリエンスの中核的な概念を示している。

さらに 17 項目の CYRM-R の尺度の信頼性と妥当性を検証するために 408 名(男性 226

名、女性 182 名)の 11 歳から 19 歳の男女を対象とした調査が実施された(Jefferies et al. 2019)。この調査では 28 項目の CYRM-R が使用された。探索的因子分析の結果、3 因子が抽出された。それぞれの因子は「個人の内面や対人関係」、「家族との関係性」、「精神的及び地域とのつながり」と命名された。1 回目の因子分析時で 5 項目が削除され、2 回目の因子分析が実施された。ラッシュ分析の結果、1 因子「精神的及び地域とのつながり」が削除された。結果として、28 項目の CYRM-R は現在の 17 項目 2 因子構造に再構成された。

V 研究の手続き

1) 研究の方法

本研究は 2021 年 7 月～10 月にかけて A 県 B 市の小学校 2 校の協力を得て実施した。学級担任を通じて小学 4 年生から 6 年生 357 名に無記名自記式の調査票、依頼書、説明書を配布した。調査票は 17 項目の CYRM-R(表 1 参照)に併存的妥当性を検討するための 13 項目の児童用 SOC スケール日本語版(表 2 参照)を加えて構成した。CYRM-R について、回答は 5 件法または 3 件法のどちらかを選択できるが、筆者と関わりのある小学校の教頭より「多くの小学生にとって選択肢が少ないほうが回答しやすい」と助言を受けたことから、本研究では 3 件法を採用した。3 件法の場合、「もっとも当てはまる」場合は 3 点で「まったく当てはまらない」場合は 1 点となる。そのため、最小スコアは 17 点、最大スコアは 51 点となる。得点が高いことはレジリエンスの高まりを意味する。未回答の項目がある調査票は全体の集計に含めない。

児童用 SOC スケール日本語版の信頼性と妥当性は坂野ら(2009)によって検証済みである。この尺度は 13 項目で構成されており、回

答は「とてもよくある」～「まったくない」(2項目については「とても楽しい」～「まったく楽しくない」)の5件法で求め、1～5点をそれぞれ付与して得点化するものである。下位尺度の有意味感は4項目、把握可能感は5項目、処理可能感は4項目となっている。得点の範囲は13点～65点であり合計得点が高いほどSOCが高いことを示す。また、学年、性別、悩みの有無(まったくない、すこしある、たくさんある)、悩みの具体的内容(自由記述)の4項目も調査票に加えた。調査票回収後、SPSS ver. 24を使用して分析を行った。主因

子法及びプロマックス回転を用いた探索的因子分析、Cronbach's α 係数の算出、児童用SOC スケール日本語版との相関分析を行った。

CYRM-Rの使用にあたり、筆者が作成した日本語訳を筆者と指導教員が原版と比較、点検して翻訳に誤りがないかどうかを確認した。その後、筆者と関わりのある小学校の現職の校長及び教頭による点検を受けて小学生にとって理解しやすい表現に改めた。また、指導教員を通じてRRCにCYRM-Rの日本語版作成の許可を得た。

(表1: Child and Youth Resilience Measure-Revised 項目)

		はい	どちらでもない	いいえ
	このページのしつもんは、全部で17問あります。それぞれのしつもんに対して、『はい、どちらでもない、いいえ』と3つのこたえがあります。いちばんあてはまるところに○をつけてください。あまり考えこまずに、楽な気持ちで答えてくださいね。			
1	クラスの人たちに、合わせることができる。	3	2	1
2	勉強をがんばることは、とても大切だ。	3	2	1
3	外に出かけたときに、きまりを守って行動できる。	3	2	1
4	お父さんやお母さんは、いつもあたたかく見守ってくれている。	3	2	1
5	お父さんやお母さんは、あなたの性格や友だちについてよく知っている。	3	2	1
6	おなかがすいても、おうちにたくさん食べものがある。	3	2	1
7	「あなたといっしょにいると楽しい」と友だちに思われている。	3	2	1
8	思ったことや感じたことは、全部お父さんやお母さんに話している。	3	2	1
9	なかよくしてくれる友だちがいる。	3	2	1
10	学校は楽しいところだ。	3	2	1
11	こまったときは、お父さんやお母さんが助けてくれる。	3	2	1
12	こまったときは、友だちが助けてくれる。	3	2	1
13	「あのだけえこひいきされてずるい」と思ったことはない。	3	2	1
14	とくいなことを、友だちに見せる機会がある。	3	2	1
15	おうちでお父さんやお母さんといっしょにいと、気持ちが落ち着く。	3	2	1
16	今がんばっていることは、将来、役に立つと思う。	3	2	1
17	(お正月、節分、ひな祭りや神社のお祭りなど)昔から日本にある伝統的な行事は楽しい。	3	2	1

(表2：児童用SOCスケール日本語版 項目)

	このページのしつもんは、全部で11問あります。それぞれのしつもんに対して、『とてもよくある、よくある、ときどきある、めったにない、まったくない』と5つのこたえがあります。いちばんあてはまるところに○をつけてください。あまり考えこまずに、楽な気持ちで答えてくださいね。	とてもよくある	よくある	ときどきある	めったにない	まったくない
1	あなたは「自分のまわりで起こっていることがどうでもいい」という気持ちになることがありますか？	1	2	3	4	5
2	あなたは、これまでに、「よく知っていると思っていた人が、思ってもみなかった行動をしてビックリした」ことはありますか？	1	2	3	4	5
3	あなたは、「あてにしていた人がっかりさせられた」ことはありますか？	1	2	3	4	5
4	あなたは、「不公平なあつかいを受けている」という気持ちになることはありますか？	1	2	3	4	5
5	あなたはこまったとき、「どうすればよいかわからない」と感じることはありますか？	1	2	3	4	5
6	あなたは、「自分の気持ちや考えがまったくわからない」と感じることはありますか？	1	2	3	4	5
7	あなたは、ほんとうなら感じたくないような感情を持ってしまうことがありますか？	1	2	3	4	5
8	どんな強い人でも、ときには「自分はダメな人間だ」と感じることはあるものです。あなたは、これまで「自分はダメな人間だ」と感じたことはありますか？	1	2	3	4	5
9	あなたは、「今、何が起きようとしているのかははっきりわからない」という不安な気持ちになることがありますか？	1	2	3	4	5
10	あなたは、「毎日やっていることにほとんど意味がない」と感じることはありますか？	1	2	3	4	5
11	あなたは、「自分でわけがわからない行動をしてしまうのではないか」と不安になることはありますか？	1	2	3	4	5

	このページのしつもんは、全部で2問あります。それぞれのしつもんに対して、『とても楽しい、楽しい、まあまあ、あまり楽しくない、まったく楽しくない』と5つのこたえがあります。いちばんあてはまるところに○をつけてください。あまり考えこまずに、楽な気持ちで答えてくださいね。	とても楽しい	楽しい	まあまあ	あまり楽しくない	まったく楽しくない
12	将来のあなたは、日々の出来事をどのように感じながら過ごしていると思いますか？	5	4	3	2	1
13	あなたは、毎日の出来事をどのように感じながら過ごしていますか？	5	4	3	2	1

2) 倫理的配慮

本研究は、北星学園大学研究倫理審査委員会の承認(21-研倫第22号)を得て実施した。調査対象者に対しては、研究目的、研究内容、研究方法、協力の任意性、プライバシー保護、研究結果の公開方法、及び協力の有無によって不利益を被らないことを文書にて説明し、理解と協力を求めた。研究対象が未成年のため、必要に応じ保護者の助言を求めることが

できるとした。回答した調査票は密封した返信用封筒またはオンライン(Google Form)で回収し、調査票の返送またはオンライン上での回答をもって本研究の主旨を理解し協力することに同意したと判断した。

3) 分析方法

因子分析の標本妥当性を検討するために、Kaiser-Meyer-Olkin値を算出した(表3参照)。

探索的因子分析(因子負荷量 0.3 未満は削除)による因子抽出を行い、構成概念妥当性の検討を行った。因子数は構造行列及びスクリープロットを用いて判断した。項目間の相関行列からクロンバック α 係数を求め、内的整合

性を検討した。併存的妥当性の検討については、CYRM-R と児童用 SOC スケール日本語版のそれぞれの合計点数を用いて Spearman の順位相関係数を求めた。分析には SPSS ver. 24 を使用し有意水準は 1%とした。

(表 3 : KMO および Bartlett の検定)

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測定		0.755
Bartlett の球面性検定	近似カイ 2 乗	500.111
	自由度	136
	有意確率	0.000

VI 研究結果

A 県 B 市の小学校 2 校の小学 4 年生から 6 年生 357 名のうち 139 名(回収率 38.9%)の協力を得ることができた。そのうち回答に欠損がなかった 137 名(有効回答率 38.3%)を分析の対象とした(表 4 参照)。分析の結果、次のことが明らかになった。悩みが「まったくない」児童 ($n=95$) の CYRM-R 得点は 46.92($SD=3.70$)であり、悩みが「ある」と回答した児童($n=42$)の得点は 44.80($SD=4.45$)であった。悩みが「ある」と回答した児童の内、悩みが「すこしある」児童($n=35$)、悩みが「たくさんある」児童($n=7$)の CYRM-R 得点の平均点はそれぞれ 45.42($SD=4.39$)、41.00($SD=3.59$)であった(表 5 及び表 6 参照)。ここから悩みが「まったくない」児童の CYRM-R 得点が悩みの「ある」児童の得点よりも高くなっていることがわかった。等分散を仮定しない Welch の t 検定を行い、悩みが「まったくない」児童の得点と悩みが「ある」児童の得点を比較した結果、 $t(67)=2.69$,

$p<.001$, $d=0.54$, 95%CI[0.54, 3.68]で有意差があり、悩みが「まったくない」児童の CYRM-R 得点が有意に高くなっていることがわかった。

探索的因子分析により 4 つの因子が抽出された(表 7 参照)。その内容から第 1 因子を「両親への信頼感」、第 2 因子を「自分自身に対する自信」、第 3 因子を「友達等との関係性」、第 4 因子を「困難な状況への前向きな適応」と命名した。全体の Cronbach's α 係数は 0.761 であった。第 1 ~ 第 4 因子の Cronbach's α 係数は 0.658~0.803 であった。CYRM-R と児童用 SOC スケール日本語版の間には中程度の有意な正の相関関係($\rho=0.484$ $p<0.001$)がみられた。

また、悩みの具体的内容(自由記述)に回答した 41 名のうち、友人との関係について悩みがあると回答した児童が 14 名(34.1%)と最も多く、次いで学業について 10 名(24.3%)、自分の体調について 7 名(17.0%)と続いた。家族との関係と回答した児童は 5 名(12.2%)だった(表 8 参照)。

(表4：回答者の属性 (N=137))

		男子	女子	合計
学年	4年生	17	18	35
	5年生	28	26	54
	6年生	23	25	48
合計		68	69	137

(表5：悩みの有無 (N=137))

まったくない		95
ある	すこしある	35
	たくさんある	7
合計		137

(表6：各尺度の分布)

Child and Youth Resilience Measure-Revised (CYRM-R)

児童用SOCスケール日本語版

悩みの有無	まったくない	
		平均値 46.92
		標準偏差 3.70
		中央値 48.00
		最小値 36.00
		最大値 51.00
	ある	平均値 44.80
		標準偏差 4.45
		中央値 45.00
		最小値 32.00
		最大値 51.00
	すこしある	平均値 45.42
		標準偏差 4.39
		中央値 46.00
		最小値 32.00
		最大値 51.00
	たくさんある	平均値 41.00
		標準偏差 3.59
		中央値 42.00
		最小値 37.00
		最大値 47.00

悩みの有無	まったくない	
		平均値 50.27
		標準偏差 7.38
		中央値 50.00
		最小値 29.00
		最大値 64.00
	ある	平均値 43.92
		標準偏差 9.61
		中央値 44.00
		最小値 21.00
		最大値 59.00
	すこしある	平均値 45.68
		標準偏差 8.72
		中央値 47.00
		最小値 21.00
		最大値 59.00
	たくさんある	平均値 35.14
		標準偏差 9.61
		中央値 35.00
		最小値 25.00
		最大値 52.00

(表 7 : CYRM-Rの探索的因子分析結果 (主因子法、プロマックス回転) N=137)

全体のCronbach's $\alpha=0.761$		因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	項目削除後の α
因子 I : 両親への信頼感 (Cronbach's $\alpha=0.691$)						
1	お父さんやお母さんは、いつもあたたかく見守ってくれている	0.860	-0.145	0.085	-0.073	0.741
2	こまったときは、お父さんやお母さんが助けてくれる	0.787	0.068	-0.101	0.030	0.740
3	外に出かけたときに、きまりを守って行動できる	0.431	0.276	-0.405	-0.056	0.762
4	おうちでお父さんやお母さんといっしょにいと、気持ちが落ちつく	0.365	-0.033	0.153	0.284	0.741
17	お父さんやお母さんは、あなたの性格や友だちについてよく知っている	0.337	0.320	0.100	-0.123	0.740
因子 II : 自分自身に対する自信 (Cronbach's $\alpha=0.722$)						
5	今がんばっていることは、将来、役に立つと思う	-0.198	0.580	0.042	0.257	0.751
6	おなかがすいても、おうちにたくさん食べものがある	0.024	0.539	-0.133	0.041	0.755
7	思ったことや感じたことは、全部お父さんやお母さんに話している	0.201	0.410	0.157	0.052	0.728
8	「あなたといっしょにいと楽しい」と友だちに思われている	0.198	0.370	0.328	-0.147	0.730
因子 III : 友達等との関係性 (Cronbach's $\alpha=0.658$)						
9	クラスの人たちに合わせることができる	-0.114	0.067	0.636	-0.114	0.750
10	とくいなことを、友だちに見せる機会がある	-0.087	0.262	0.428	-0.089	0.751
11	学校は楽しいところだ	0.211	-0.195	0.393	0.202	0.747
12	「あのただけえこひいきされてずるい」と思ったことはない	0.042	-0.120	0.377	-0.196	0.780
因子 IV : 困難な状況への前向きな適応 (Cronbach's $\alpha=0.803$)						
13	勉強をがんばることはとても大切だ	0.037	-0.022	-0.089	0.606	0.761
14	(お正月、節分、ひな祭りや神社のお祭りなど) 昔から日本にある伝統的な行事は楽しい	0.019	0.072	-0.223	0.556	0.766
15	なかよくしてくれる友だちがいる	-0.120	0.126	-0.028	0.332	0.763
16	こまったときは、友だちが助けてくれる	0.083	0.145	0.295	0.301	0.738

因子間の相関行列					
	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	
因子 I	1.000	0.534	0.651	0.318	
因子 II	0.534	1.000	0.547	0.314	
因子 III	0.651	0.547	1.000	0.416	
因子 IV	0.318	0.314	0.416	1.000	

(表 8 : 悩みについての自由記述回答 (N=41))

	悩みの内容	人数	割合	主な回答内容
1	友人との関係	14	34.15%	ドッチボールのときに全然パスしてくれない、友人への嫉妬、陰口を言われてそう、無視される、いじめ、友人のことを考えすぎてしまう、「サッカーしよ」と言われたとき断れない(本当は行きたくない)
2	学業について	10	24.39%	算数の説明が分からない、勉強が難しくついていけない、受験のこと
3	自分の体調について	7	17.07%	(心身ともに)最近疲れている、咳が出る、生理が怖い
4	自分の性格について	6	14.63%	心の病気でおなかが痛くなったり吐き気がする、問題や悩みをひとりで抱えてしまう、コミュニケーション能力が低い
5	学校生活について	6	14.63%	先生がすぐ怒る、委員会のこと、クラスの人たちがうるさく勉強に集中できない、学校に行くとき朝眠い、学校に行くのが面倒
6	家族との関係	5	12.20%	お母さんの病気が心配、妹が暴力をふるう、お父さんがすぐ怒る、家庭環境
7	ゲームについて	4	9.76%	テレビゲームをやりすぎて怒られる、最近のゲームに飽きてきた
8	習い事について	2	4.88%	体操教室、習い事の宿題が難しい

※複数回答あり

Ⅶ 考察

本研究における悩みの具体的内容の記述を整理した結果、児童が家庭環境よりむしろ、学校生活における友人関係や学業について悩みを抱えていることがわかった。友人関係の悩みは周囲から孤立している状況をうかがわせるものではなく、他者とのつながりを維持する過程においてストレスを感じていることを示唆していた。身体的、精神的不調をきたしている児童も一定数いることがわかったが、これは友人関係の悩みに加え、学習指導要領の改訂による標準時数増や外国語教育の導入等により、学業に対する負担が増して学校生

活に余裕がなくなったことも要因のひとつであると考えられる。このように悩みは内的要因、外的要因の双方の影響を受けていると言える。

また、悩みの有無(まったくない、すこしある、たくさんある)で CYRM-R の得点を比較した結果、次のことがわかった。悩みを抱えている児童の社会生態レジリエンスは悩みを抱えていない児童と比較し相対的に低い得点となることから、児童の抱える悩みは社会生態レジリエンスと一定の関係がある。先に明らかにした悩みの具体的内容の記述から、学校生活での対人関係による悩みを抱えてストレス状態にあるものの、レジリエンスが十分

に作用することなく、結果的に自分自身のことや他者との関係性を肯定的に捉えられない状況であることが考えられる。その一方で、悩みを抱え、心をかき乱されるほどの出来事に直面しても、レジリエンスが作用することで、現在置かれている状況へ前向きな適応を示している児童も一定数いるであろうということが読み取れた。

児童の抱える悩みの多くが学校生活に関することで占められていることは先に述べたとおりである。それが CYRM-R の得点に影響を与えていることは、彼らを取り巻く対人関係のほとんどが学校でのつながりによるものと無関係ではない。本研究によって、学校で友人とのつながりを保つことに負担やストレスを抱えている児童が一定数存在することがわかった。しかし、彼らにとって友人とのつながりはネットワーク上で平衡状態を保つために必要不可欠なものである。友人とのつながりは児童にとって居場所となり得る反面、負担やストレスの要因ともなる。彼らにとって必要なのは友人等とのつながりに一定の距離感を保ちつつ、自分の心を許せるような拠りどころなのだろうと考える。

そして、探索的因子分析により明らかになった4つの因子は児童の持つ社会生態レジリエンスの構成要素といえる。社会生態レジリエンスについて、本研究を通じて明らかになったことは次のとおりである。レジリエントな児童は両親や友人等との相互作用の過程で肯定的な関係性を維持するとともに、自己肯定感や自己効力感を育む。このように社会生態レジリエンスは内的要因に作用する。これらを基盤とすることで、児童は学校生活において悩みと捉えているストレスにより引き起こされるストレス状態に置かれることもあるが、それらに前向きに順応することで児童を取り巻く関係性の大部分を占める学校におけるソーシャルネットワーク上で平衡状態

を保つことができる。このように社会生態レジリエンスは外的要因に肯定的な影響を与える。児童にとっての社会生態レジリエンスとは、困難な状況下においても、彼らが属するネットワーク上での平衡状態を保つために、彼らを取り巻く社会環境との関係性を肯定的に捉え、前向きな適応のために、それらを有効活用できることであると考えられる。

Ⅷ 課題

RRC で開発された「Child and Youth Resilience Measure-Revised(子どもと青少年のレジリエンス尺度修正版)」の日本語版を作成し、信頼性と妥当性について検討した。抽出された各因子の下位尺度において内的整合性を検討し、また児童用 SOC スケール日本語版との併存的妥当性も確認された。

しかし、原版は2因子構造にも関わらず、本研究では4因子が抽出され、構成概念妥当性において原版と異なる因子数が抽出された。また、児童用 SOC スケール日本語版とは有意な相関関係を示したものの高い数値ではなかった。その背景には、英語圏の同年代の児童との文化的差異、収集したサンプルサイズが十分ではなかったこと、日本語版作成にあたり訳語、訳文の慎重な確認が必要だったことが考えられる。そのため、将来における課題として日本語版の訳語、訳文を再度、点検、修正した上でより大きなサンプルサイズを用いた調査を積み重ねていきたい。

(謝辞)

本研究は、2021年度 北海道社会福祉学会研究助成により実施したものである。助成に対し、感謝申し上げたい。また、本研究の主旨を理解し協力してくれた小学校の児童、保護者、教職員の皆様に感謝申し上げたい。

文 献

- Antonovsky, A. (1987). *Unraveling The Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well*. San Francisco, CA: Jossey Bass.
- Capra, F., Luisi, P. L. (2014). *The Systems View of Life*. New York, NY: Cambridge University Press.
- 土井隆義(2014)『つながりを煽られる子どもたち—ネット依存といじめ問題を考える』岩波書店
- Gilligan, R. (2017). Resilience Theory and Social Work Practice. In Turner F. J. (Ed.), *Social Work Treatment 6th edition*. New York, NY: Oxford University Press.
- Gitterman, A. & Germain, C. B. (2020). *The Life Model of Social Work Practice 4rd edition*. New York, NY: Columbia University Press.
- Hart, K. E., Wilson T. L., & Hittner J. B. (2006). A Psychosocial Resilience Model to Account for Medical Well-being in Relation to Sense of Coherence, *Journal of Health Psychology* 11(6)857-862.
- Jefferies, P., McGarrigle, L., & Ungar M. (2019). The CYRM-R: A Rasch-Validated Revision of the Child and Youth Resilience Measure, *Journal of Evidence-based Social Work* 16(1) 70-92.
- Keil, D. C., Vaske, I., & Kenn., K. et al. (2017). With the strength to carry on: The role of sense of coherence and resilience for anxiety, depression and disability in chronic obstructive pulmonary disease, *Chronic Respiratory Disease* 14(1)11-21.
- Luibl, L., Traversari, J., & Paulsen, F. et al. (2021). Resilience and sense of coherence in first year medical students – a cross-sectional study, *BMC Medical Education* 21(142).
- 文部科学省 (2009)『子どもの徳育に関する懇談会 (第 11 回)』
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282770.htm)
- 中村和彦(2023)「成人のレジリエンス尺度 (ARM-R) 日本語版」の作成と若者のレジリエンスを構成する因子の基礎的分析』『北星学園大学社会福祉学部北星論集』60, 39-50.
- Resilience Research Centre. (2018). *CYRM and ARM user manual*. Halifax, NS: Resilience Research Centre, Dalhousie University. Retrieved from <http://www.resilienceresearch.org/>
- 坂野純子・戸ヶ里泰典・山崎喜比古・ほか (2009)「児童用 SOC スケール日本語版開発の試み」『学校保健研究』51(1), 39-47.
- 心理科学研究会 (2009)『小学生の生活とこころの発達』福村出版
- Ungar, M., Connelly, G., & Liebenberg, L. et al. (2017). How Schools Enhance the Development of Young People's Resilience, *Social Indicators Research* 145(2)615-627.
- Ungar, M., Liebenberg, L., Bppthroyd, R., et al. (2008). The Study of Youth Resilience Across Cultures: Lessons from a Pilot Study of Measurement Development, *Research in Human Development* 5(3)166-180.
- 山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子(2008)『ストレス対処能力 SOC』有信堂